

- |   |    |
|---|----|
| 1. 現在のインド人のルーツである初期アーリア（アーリヤ）人社会の民族宗教。後に民間信仰を取り込み、ヒンドゥー教（これも民族宗教）化する。                                   | 1  |
| 2. 狭義のインド人やイラン人。広義ではインド＝ヨーロッパ語族全体。インドにはB.C.1500年頃侵入・定着し、インダス文明滅亡の原因に。                                   | 2  |
| 3. バラモン・クシャトリア・ヴァイシャ・シュードラを基本とする古代インドの職能別身分制度。語義：ヴァルナ「種姓」。カーストはポルトガル語「血統」に由来                            | 3  |
| 4. ヴァルナ（カースト）制の最高身分で司祭階級。語義：ブラフマンの漢訳  | 4  |
| 5. <b>BOOK</b> バラモン教の聖典。語義：「知恵」   | 5  |
| 6. 魂が生きているときの業（カルマ）に応じて再生し続ける苦しみ。   | 6  |
| 7. サンスクリット語の「業（ごう）」で、「行為」の意味。   | 7  |
| 8. 輪廻転生の苦しみから脱却して、永遠の安らぎを得ること。  | 8  |
| 9. 『ヴェーダ』の付属書にみられる哲学的思索。語義：「奥義書」  | 9  |
| 10. ウパニシャッド哲学で宇宙の原理ブラフマン（梵）と個体の本質アートマン（我）の一体化（一如）を自覚すること。これによって解脱。                                      | 10 |
| 11. ウパニシャッド哲学の宇宙の原理。  | 11 |
| 12. ウパニシャッド哲学の個体の本質。  | 12 |
| 13. バラモン教に民間信仰が結びついて生まれた「インド人の宗教」。  | 13 |
| 14. ヒンドゥー教の「一体三神」の創造神。あまり人気がない。   | 14 |
| 15. ヒンドゥー教の「一体三神」の維持神。ブッダも化身の一つとする。   | 15 |
| 16. ヒンドゥー教の「一体三神」の破壊神。舞踊の神でもある。   | 16 |
| 17. <b>PERSON</b> B.C. 5・4世紀（またはB.C. 6・5世紀）、インド人で仏教の開祖。語義：釈迦はシャカ族の王子であったことに由来。仏陀は本来「悟りし者」を意味する普通名詞ブッダから | 17 |
| 18. ブッダが東門で老人、南門で病人、西門で死人、北門で修行者に出会い、出家を決めたこと。  | 18 |
| 19. 四つの普遍的真理の命題。語義：「仏教原理（ダルマ）の印」。   | 19 |
| 20. 四法印の一つで、「人生の全ては苦しみ」。  | 20 |
| 21. 自分を「煩（わずら）わせ悩ませる」原因となる自己や所有物に執着（我執）する心の持ち方。別名は渴愛（かつあい）。   | 21 |
| 22. 百八つの煩惱の中心。貪（とん 「むさぼる」）・瞋（しん 「いかる」）・痴（ち 「しれる」）。  | 22 |
| 23. 四苦八苦の四苦。  | 23 |
| 24. 四苦八苦の「愛するものと離別する苦しみ」。   | 24 |
| 25. 四苦八苦の「憎いものと出会う苦しみ」。   | 25 |
| 26. 四苦八苦の「求めるものが得られない苦しみ」。  | 26 |
| 27. 四苦八苦の「五蘊（ごうん 色くしき 物質と肉体）・受く感受作用）・想く表象作用）・行くぎょう 意思や記憶）による苦しみ」。                                       | 27 |
| 28. 四法印の一つで、「全ての存在は常に変化し、とどまることがない」。  | 28 |
| 29. 四法印の一つで、「全ての存在には本質（我＝不変の実体）がない」。  | 29 |
| 30. 四法印（特に最初の三つ）に対する無知。苦の根本原因。  | 30 |
| 31. 四法印の一つで、「他の三つの法印を正しく知る（悟る）ことで、煩惱を滅ぼし得られる安らかな境地」。  | 31 |

T. Q. 「ブッダが説いた四法印とは何か？」

T. A.

ブッダは、人は誰でもみんな百八つの煩惱によって苦しんでいることを説き（一切皆苦）、すべてのものは絶えず変化し（諸行無常）、不変の実体はないとした（諸法無我）。また、これら三つを正しく認識する（悟る）こと（涅槃寂靜）で煩惱を滅ぼせるのであると説いた。これら四つの真理を、まとめて四法印という。